



児童に囲まれ、笑顔で記念撮影する国枝選手(中央)(17日、石巻市で)

が17日、石巻市を訪れ、地元の子どもたちと交流した。初めて被災地を訪れたという国枝選手は「つらい経験をしながらも子どもたちはみんな明るくて逆に元気をもらった。震災の経験を経てきつと強くなるはず」と話した。

同市立釜小では、国枝選手は児童とハイタッチを交わしながら華麗な車いす操作を披露し、かけっこで競走したり、記念撮影したりした。「どうやって金メダルが取れたか」という質問に、国枝選手は「金メダルを取りたい、誰にも負けたくないという気持ちで努力



橋脚に設置された津波到達高の表示板

東松島大橋橋脚に危険水位表示板

国土交通省北上川下流河川事務所は、東松島市内を流れる鳴瀬川に架かる東松島大橋の橋脚に、洪水時の危険水位表示板と、昨年の震災時の津波到達高を示す表示板を設置した。危険水位表示板は、下段は黄色で「氾濫注意」、上段は赤色で「氾濫危険」を表した。

表示し、堤防の上からでも水位の状況が一目でわかる。同事務所は今月中に北上川など5河川の21か所に設置する予定だ。

洪水時に巡視活動する消防団員が、河川水位から氾濫の危険性を判断できる表示が必要と要望していた。

同市消防団の栗石堅持団長は「水位が具体的な数値で伝えられ、洪水時の対応がしやすい」と歓迎していた。

伝える



2008年から1年かけて、非常時の事業継続計画(BCP)を策定した。

「いすれ必ず起きるといわれていた宮城県沖地震の対策として、被災時に優先的に継続・早期復旧を目指す重要業務をリストアップし、目標時

廃棄物処理・上下水施設清掃会社「鈴木工業」専務

鈴木 伸弥さん 33

事業継続計画 訓練が重要

間までに復旧するための手順を定めたBCPを作り出した。これを基に、停電や電話不通など、さまざまな状況を想定し、どうやって目標を達成するかを考える研修を全社員を対象に行いました。衛星電話や発電機といった非常時に必要なものが明確になり、備えておくことができました。

トイレが詰まったりしているとか、焼却炉の復旧には3か月ほどかかる見込みでした。山形県内の同業者に処理してもらうことになり、地震の6日後には廃棄物の受け入れを再開しました。

震災では、海に近い廃棄物処理施設が津波に襲われ、下水管がずれて

「ラジオで津波が来ることを知り、すぐ避難したので、従業員は全員無事でした。安否確認や顧客との連絡に衛星電話が役立ちました。顧客の中には病院もあり、衛生管理中には病院長も、衛生管理が重要です。下水管がずれて

「震災の経験を基に防災体制をさらに見直した。」

「パソコンやファクスに、インバーター(電力変換器)を搭載していない発電機をつなげると、不具合が生じることがあるなど、実際に体験して初めて分かったことがたくさんありました。とはいえ、災害時の対応を細かく決めておいても、実際には何が起きるか分かりません。BCPに定められた目標を達成するため、一人ひとりが何をすればよいかを考える訓練が重要です。『作っておしまい』です」

(飯田祐子)



災の津波で防波堤のほとんどが流失したため、県が